

文化薫道

文化の風が吹くまち ちくしの

問い合わせ先／文化財課(歴史博物館内)

☎(092)8419

一頁の三十七

いつくしの地名、筑紫

本市の名前にも含まれる「筑紫」は、現代では一般的に「ちくし」と読まれ、大字筑紫に残る地名です。

古くは九州全体や九州北部地域を示す地名で、「つくし」と読まれることもありました。奈良時代、万葉仮名(漢字の音訓で文字を表したもので記された『万葉集』には、「都久紫」「都久之」「豆久志」など「つくし」を表記した歌が収められています。

一方で、『続日本紀』や『令集解』では、「巫志」や「巫紫」「竹志」とあり、おそらく「ちくし」という音が当てられたと考えられ、古来より「ちくし」と「つくし」が併存して使われていたようです。

「筑紫」の地名の由来はいくつかありますが、『筑後国風土



県社筑紫神社

記「逸文の中に、次のような説話が伝えられています。

「昔、荒ぶる神があり、人々の命が危険にさらされていた。この神を人命尽(つくしの神と呼び祈ったところ、犠牲者が出なくなった。そこで、筑紫神(つくしのかみ)と名付けて祭り、この地を筑紫と呼ぶようになった」というものです。そして、この神を祭ったのが筑紫神社といわれています。

今では「筑紫」は「ちくし」と読み、「つくし」と読むこと

は少なくなりましたが、由来となった「筑紫神社」に祭られている「筑紫神(つくしのかみ)」は、古い読みを今に伝えていきます。

地名の「文字」は記録として残り、その「読み」は口伝のため残りにくいものです。時代ごとにその地名がどのように読まれたのか、はっきりしないことが多いからこそ、地名を知れば知るほど謎は深まり、私たちの興味をかき立てるものがあるのではないのでしょうか。

